

エルフの国の

宮廷魔導師

になれた
ので

姫様に

性的な悪戯を
してみた

挿絵 成海クリステイアーノート
小説 磯貝武連

試し読み版

第一章	詐欺師、宮廷魔導師になる	006
第二章	姫様、治療を始める	029
第三章	姫様、嘘を教わる	063
第四章	姫様、喪う	095
第五章	姫様、撮られる	132
第六章	女騎士、決意する	156
第七章	女騎士、トイレでされる	199
第八章	女騎士、約束する	239
第九章	女騎士、優しくされる	288
番外篇	女騎士、お尻を責められる	324

登場人物紹介

キース・ ブロックハウンド

「死霊の夜明け団」の元・正魔導師。盗撮が原因でクビになり詐欺師となっていた。攻撃魔術では史上最低と言われたがちまちました魔術は得意。人呼んで「ちっさい男キース」。

ルー

ケットシー
下位の猫妖精でキースの使い魔。

アイシャ

ナイアの護衛騎士を務めるデザート・エルフ。正義感が強くお堅い。ナイアが懐くキースのことが気に入らない。

ナイア

エルフ領にある小国セイムラッドのお姫様。エルフなのに生まれつき魔法が使えなかった。素直な性格で疑うことを知らない。

どうやって舐めたりどうやって吸えば、あの不味い^ま霊葉がどぶどぶと出てくるのか。舌の使い方も唇の窄め方も、やつと少しずつつ分かってきたのだ。

それに薬の味だって慣れれば大丈夫。初めは正直吐きそうなほどに気持ち悪かったが、今では普通に飲める。

今日だって、あと少しで出そうな感じがナイアには分かっていた。ぴくんぴくと魔道具が震え出して、先っぽの部分がばんばんに膨らんできたからだ。

今からならまだ授業時間はたっぷり残っている。という事はキースにいつぱい気持ちよくして貰える!!

「ぢゅず——っ！ ぢゅぼぢゅぼぢゅぼ!!」

「おほっ！ ど、どうしたんですか姫様!? うおっ、すげっ!!」

「んぐ！ んぐぐ!!」

「そんな喉奥まで!? 姫様頑張りすぎっ!!」

「んごっ、ぶふえ……ちゆるるる……れろぢゅぼ!」

「うおっ、おお!! 出る!! 魔道具からお薬が!! 出ますよ!! 姫様っ!!!」

「んぐう、んぐううう!!」

「で……おおっ——……でてる……くっ、絞り取られてる……」

ナイアは頬を窄めて魔道具の中に残ったお薬を最後の一滴まで吸い出すと、魔道具から口を離して啗内をキースに見せた。キースは毎回霊葉を飲めるか確かめるのだ。

目隠ししたままなので何も見えないが、がさごとキースが何かをする音——ズボンを

穿く音が聞こえて、そのあとじつくり口の中を見られているのを感じる。

「はあ……今日もいっぱい出ましたね」

「ふえ……」

「そうだ。今日はちょっとお薬を口の中でぐちゅぐちゅしてみましょう」

「ふえ？」

そんな事を言われたのは初めてだったが、ナイアは言われた通りに生臭い薬を口の中でぐちゅぐちゅとさせる。

どろりとした感触が口いっぱいに広がり、臭みのある舌を刺す味が全体にいき渡った。鼻からカルキ臭が抜けて泣きそうになる。

「それじゃ一回お口を開けて」

「うえう……くぼ……」

キースは自分のザーメンがコポッと音をさせ泡立って糸を引き、ナイアの口腔を穢けがした事に満足した。

「はい！ いいです。ごつくんしましょう！」

「んんんっ!! へぐう……んぐ……んぐ……ぱはあ……」

口の中にまだ何かが膜を張って残っている気がしてナイアは気持ちが悪かった。けれど目隠しを取って貰い顔を上げると、

「よく出来ましたね。偉いですよ」

キースが微笑み頭を撫でてくれた。それだけで努力した甲斐があると思える。

「それじゃ葉も飲めたので、治療を始めましょうか」

「はい！」

嬉しそうに頷くナイアを立たせて、キースは自分が防水シートの上に横になった。

「さあ姫様。俺の顔の上に跨がるのです」

「へ？ ……ええええええええ!!」

「さ、おはやく！」

「で、出来ません!! 出来ませんそんな……男の方の……しかもキース様のお顔の上に跨がるなんて……わたくし……」

横になり真剣な眼差しでキースはナイアを見つめる。そのキリつとした表情には有無を言わせぬ迫力があつた。

変態である。少女に顔騎をねだる真正の変態である。真面目な顔をした変態がいる。

普通なら助けを呼んでもいいレベルだが、

「……またがなきや……ダメなのですか？」

「今日はそういう日なのです……」

どういう日だよ。

けれどキースの事を信じるしかないナイアは「ふうう……」と目に涙を溜め、その顔の上を跨いだ。

キースの顔の真上に豹柄紐ビキニアーマーのクロッチ部分がやってくる。

「いいですよ姫様、そのまましゃがむんです」

「しゃがむ!？」

「そうです。俺の顔に座るように……俺の口に舐めて欲しい所を押しつけるように!!」
変態が叫んだ。

「できません……できませんできませんっ!!」

必死に首を振って拒否をするナイアに、

「俺を、信じて下さい」

これは少女の脚の間にいる男が言った台詞である。ナイアが股下に視線を送ると、真面目な顔のキースが自分を見上げていた。

「そんな……な……わたくし……」

じつと見られている。そして見つめられるだけでもう何も言っていない。

「はううう……キース様……お許しください」

お許しくださいもなにも、それを求めたのはキースである。

しかしナイアには、自分のせいでこんな事をさせているのだという気持ちがあったのだ。目を瞑りキースの顔の上にしゃがみ込む。両脚を開き膝を曲げ、股の部分をキースの口の部分に合わせる。体重はかけないように気をつけた。

白金髪ツインテールの豹柄紐ビキニアーマーを着た王族貴種エルフがウンチングスタイルで男に顔騎を行っている。属性が多すぎてちよつと混乱しそうな感じだ。

「キース様……キースさまあ……」

我知らずキースの名を呼び、ナイアは必死で恥ずかしさに耐えていた。

「ご無礼をお許してください……キースさまあ!!」

そんなナイアのお尻を掴んで、キースはボトムムの生地越しにナイアの秘所を舐め始めた。
「んあ! んああああっ!!」

クロッチ部分はキースの唾液とナイアの愛液ですぐにベチヨベチヨに濡れてきた。

キースに跨がっているというイケない事をしている感がナイアの背筋を駆け上がり、愛液の量を増やした。

「ふわあ……ふわああ!!」

ボトム越しにこの悶えようである。キースは紐を外すと、ボトムを引っ張って脱がせた。ナイアに教育を始めて既にひと月近く。ナイアのそこは穴はまだだがそれ以外の部分は少しづつ大人になってきていた。

クリトリスはほんの少しではあるが確実に大きくなり、ピラピラも成長してきている。大人でもなく、かと言って子供すぎない。

一番いい食べ頃おま○こだ。しかも処女である。

出したばかりのおちんぼが硬度を持っていくのをキースは実感した。

(こりゃ、そろそろ頂き頃かな?)

下卑た事を考えて、キースはナイアの半熟おま○こをべろと舐め続ける。

「うひゃ!! ……ひっ……んあああああっ!!」

クリトリスはすぐに勃起し愛液はキースの顔にトロリと垂れてくる。口の周りをべちゃべちゃに汚して、キースはナイアの出す蜜を舐めすくい飲んだ。



「緊張してますね？ 緊張をほぐす為の息法をやりますか？」

「息法……はい！ やります!!」

緊張をほぐす為のとか言っても、結局は普通のキスである。

だがそれが嬉しいナイアは喜んで頷くと、目を瞑って唇を突き出す。

「ちゅ、ちゅ、んちゅ……ひめしゃま、んっ！ 姫様は息法がお好きですわね、んちゅる」

「ふあ、ちゅちゅ、んちゅう、はい、んちゅんちゅうう、らいすきれす……」

唇を重ね合う顔を映し、その間に右手の中指と薬指をナイアの中に沈めていく。

「んんっ!! んんんんんっ!!!」

ナイアがキースの身体に手を廻して唇を更に求めてきた。

キースは指を膣内で静かに動かして柔肉の感触を確かめる。蜜が溢れるまではゆつくりと、そしてじつくりと。舌を絡めていると指に水気を感じてきたので速度を上げる。

ヌチュヌチュヌチュ！ と水気を含んだイヤらしい音が響き出す。

「はわ！ はわ!! ああ!! んぐうう!! きーすさまあ!! んちゅう!! ちゅううう!!」

その求めに応えるように指を根元までズチュズチュと突き進め、その中で指を折り曲げ膣壁の上側を引っ掻くように擦る。

「うきやあああああっ!!!」

ナイアが身体を強張らせた。キースは何度かのセックスでナイアの膣内弱点が分かって

きていた。そこは丁度キースのおちんぼの一番太い部分が当たるところだった。

指を突き入れその部分を刺激して、愛液で手がベタベタになってナイアの身体が小さく震え出したところで指を抜く。

「姫様……ちよつとすみませんね」

しがみついたナイアの腕を剥がし身体を離す。

キースの右手指は糸を引くほど濃い愛液がベツトリとついている。その指で広げさせた膣穴を魔道具で映すと、中途半端に手マンを止められたそこはヒクヒクと続きを求めて蠢いていた。

座らせていたナイアの腰に当てていたクッションを取つてもう一度横にさせると、キースは脚をナイア自身に抱え上げさせた。

「姫様、挿入ますよ」

「ハアハアハア………はい」

「挿入る時は何て言うんですか？」

「はえ？ あ、あの……おちんぼをいまからナイアのなかああああ!! んみいいい!!!」
言葉の途中でキースはナイアの膣内に硬く反つたおちんぼを突き入れた。

「姫様！ 言葉の途中ですよ！」

「あ！ ああつ!! おちんぼ、おくに、おくにいいいい!!!」

「奥に何ですか？」

「おくに!! キてますう!! ゴリゴリつて!! うにやあああああ!!」

頭をイヤイヤするように振って、ナイアはキースに叫んだ。

「きーすさま！ きーすさまあ！！ これ、いつもよりきもちいですう！！ なんで？ なんてええっ??」

やつと膣穴で感じられるようになったところを、膣内急所責めでほぐされて貫かれたのだ。痛みが残っていた今までの違いもあり、ナイアは軽いパニックになった。

「それはですねっ！ 姫様のっ！ お身体がっ！ おちんぼにっ！ 慣れてきたからですよっ！」

言葉の途中途中で合わせて腰を突き入れ、キースは快楽に悶えるナイアを映し続けた。

ピストンをし、撮影しながら右手の親指はクリトリスをグリグリと押ししている。その同時責めの痺れるような感覚にナイアは腰を浮かせた。

「らめ！ きーすしやま！！ うひやあああ！！ しよれらめれす！！ いっしよはらめれすうう！！ きやわああああ！！」

「姫様、ダメじゃなくて、気持ちいいって言うんですよ」

「んみやあっ！！ きもちいい！ きもちいいれすうううう！！」

「お、おちんぼ！！ おちんぼなかにズボズボされると！！ ビリビリって！！ うきやあっ！！」

ナイアの膣内は今までにないほど蕩けていた。キツく狭かった膣穴はその窮屈さを残したままトトロ口の中肉を柔めかせ、襷の全てが濡れそぼっておちんぼに絡みつく。まさに

雄に射精をさせる為の雌穴だ。

そして雌穴はその持ち主自身にも電気の走るような快感を与えていた。

「ひいっ！ ひいい!! キーすさま!! こわいよ！ こわいれすっ!! あたまがふわふわ
つてしますう!!! きやあうううううううっ!!」

涎を垂らして嬌声を上げるナイアのブラをずらして胸を出させる。小さなおっぱいがピ
ストンに合わせてプルプル揺れるのを楽しむと、指で勃起した乳首を摘まんだ。

「うはあああっ!!」

少し強めに摘まむとま〇こ肉がギュッと締まった。一度フェラで出しておいて正解だっ
たとキースは安堵した。じゃないと今ので出たところだ。

キースはおっぱいを捏ねると、射精する前にナイアの記念すべき初中イキを映し取る為
ピストンを弱点責めに変える。

位置を変えナイアの膣穴の上側を擦るようにして腰を動かした。

亀頭の先端の敏感部分が膣壁に擦れて、淡い痺れがおちんぼからキースの脳へと伝わる。

(これはやばいかも)

気持ちよさに顔を顰めるが、それ以上にナイアの方が感じまくっていた。

「はえ!? はえええ!! しょれなに? ふえ? はわあああ!!! おちんぼ!! なにに!!」

膣内急所だけを責められる強い刺激の連続にナイアは鼻水さえ出して悶えた。

おま〇こがイキそうなのをキースに知らせるようにプルプルと痙攣を始めた。

「姫様……んっ！ イキそうなんですわね？」

「ふひゃあ!! はひっ!! イキシよう!!! イキシようですう!!! おま○こイキシよう!!!
おちんぼれズボズボされておま○こイク!! おま○こおおおお!!!」

エルフ姫に下品な言葉を叫ばせている満足感に射精しそうになるのを必死で堪え、キースは用意していた最後のシナリオを口にした。

「それじゃあ、おちんぼで初めてイク時はこういう格好でイクんですよ!!」

キースが右手でやった格好を、ナイアは快楽に悶え霞む頭で必死に再現する。

「そう、それを両手で!!」

「こう、んんん!! あひゃ!! あっ! うあっ!! こうれすかああ?」

「そうです!」

キースの取らせたポーズはいわゆる「ダブルピース」だった。

(エルフ姫が初おま○こイキシながらダブルピースしてるのを映してる!!)

顔を快楽にへによへによにさせ、涎と鼻水を流してダブルピースを決めるナイアの姿をキースは感動しつつばっちり映した。

「イクんです!! 姫様!! イけ!! 姫ま○こイケえええっ!!!」

「あぎゅうううううっ!! いっ……イク! おま○こイクれすうう!! きもちいいよ!!
きーすしゅまあ!! うきやああああああ……っ!!!」

ダブルピースのままナイアは絶頂を迎えた。

ナイアの腰が一度浮くと同時に膣内がギュウツと締まりそして緩む。そしてナイアはそのまま気を失った。



失神に身体が弛緩すると、ナイアの尿道からおしっこがチヨロチヨロと出てきてキースの身体にかかった。

お漏らしを身体に受けて、キースのおちんぼは漏らすようにどゅぼどびゅぼ！ とザーメン汁をナイアの中へ出していった。

失禁姿さえ映したキースはおちんぼを引き抜くと指で膣穴を広げた。真っ赤に充血したま〇こ穴からは白濁液がトロオつと流れてくる。

「オナニー専用映像ゲット〜〜！」

そう言っただけで最後に眠るように気を失ったナイアの美しい顔をアップで映す。

これからのオナニーライフの充実を楽しみにしてキースはニヤニヤと笑った。

「さ、取り敢えずここに座って下さい」

アイシヤが言われた通り便座に座ろうとすると、

「ああ、違います。そうじゃなくて、扉の方にお尻を向けて、便座の上うんこ座りで」

「はあ!!」

「あれ？ 意味わかりませんか？」

「わ、分かるが……どうしてそんな！」

「いいから言った通りに」

「く……!!」

アイシヤは顔を歪めると、ブーツを脱いで便座に乗りそのまましゃがみ込もうとした。

「あ、パンティは脱いで下さいね」

当然の事のように言うキースに、何か怒鳴りつけたかったアイシヤだが時間がないので諦めた。

ガーターベルトの上のパンティを脱ぐとキースが手を差し出す。嫌だったが渡すとキースは匂いを嗅いでいた。

「よ、よせ！」

「早くしゃがんで下さ〜い」

便座の上でしゃがむとバランス的に手は後ろの壁につき、尻を突き出すような格好になる。そして自然と脚はがに股になり軍服のスカートがまくり上がった。

アイシヤの恥部が曝け出された。丸く大きい張りのある尻タブが開かれその中央に見える

るキュッと窄んだ肛門と、そして柔らかい肉を見せる膣穴までが見える。

アイシヤのアンダーヘアは肛門にまでその範囲を広げていた。見た目は十代後半の美少女のお尻に生えたケツ毛。

まだそれほど濃くはないがインパクトがあり、キースのおちんぼはグイグイと大きくなり始めた。

「な、何している！ やるならさっさと」

アイシヤが顔を真っ赤にしてそう怒鳴ると、肛門にペロリという感触があつて「うひい!!」と声が出た。

「何をしている？ 何をしているんだ!!」

後ろを振り向くと床に膝をついたキースがアイシヤの肛門をペロペロと舐めていた。

「やめろ！ やめろ馬鹿者!! そ、そんなとこ舐めるなあ!!!」

「え？ 気持ちよくありません？」

「いいわけあるか!! し、尻の穴など舐められて……」

「でも、舐めるとヒクヒク動いてもっとよって言うてるみたいですよ？」

「う、嘘だ！ 嘘だ嘘だあ!!」

「嘘じゃありませんで、ほら……れろ、じえろお、れおれろれろ……」

「うきやあ!!」

肛門皺の一つ一つを丁寧に舐め、それが終わると真ん中の穴を舌尖でほじくる。いい感じにヒクついてきたら穴に何度もキスをする。これを繰り返すと、

「あひ！ きゃわ!! ういい……ひっ!!」

肛門から背筋を駆け上がってくる未知の感覚にアイシャは震えた。これは知ってはいけない感覚だと脳が訴える。

「だめえ……やめてくれ……そこは……ちがう……!!」

「なんだ、やっぱり感じてるじゃないですか。お汁がいっぱい垂れてきましたよ」

キースは舌を膣口にずらし愛液を舐め取った。

「あきゆうっ!!」

突然の膣穴感触にアイシャの身が震えた。

「アイシャ様、敏感になってますね」

「ちがう！ ちがう!!」

実際アイシャのそこはキースに貫かれてから感度を上げていた。

散々いたぶられたというのに痛みも感じず、次の日にはまたシテ欲しいと言うように膣が疼いた。

自分はそのような淫蕩な女ではないと必死に否定する。だが生まれて初めてのの快楽を知った身体は五十三年の鬱憤を晴らすようにキースの愛撫を喜んだ。

「あつくう!! よせえ!! 舐めるなあ!!! ひい！」

キースは陰ピラを押し広げアイシャの内器官——特に膣穴を執拗に舐め穿ほじくった。

「アイシャ様のおま○こは、れる、べちよ、んじゅう……いいですね、この形、最っ高。グロマン一步手前なのが、べろれる、たまらなくエロいです」

舌がネロネロと動き膣穴をホジホジとする度、身体の奥に喜びの火が燃えていく。そんな自分が嫌で悲しくて、それでも気持ちよくて、

「ああっ!! あんんっ!! なんで!? 私のからだ……こんな!!! やだ! やだあ!!!」

脚がガクガクと震え尻肉が揺れた。キースは舐めるのをやめると立ち上がって、右手の中指と薬指をアイシャの膣に突っ込んだ。

「ひぎい!!!」

いきなり指が入る一番奥にまで突き入れられアイシャが悲鳴を上げる。キースはそれに構わず手マンを始めた。

突き入れこそ荒々しかったが、その後は緩やかに指先で膣肉を擦る。

「あ、あえ……な! ひやあ……」

だがその速度が徐々に激しくなっていく。

「ひ! ひあ!! あひやう! あひやあああ!!!」

アイシャは声を出さないようにと懸命に歯を食いしばるが、その隙間からは悲鳴じみた嬌声が漏れてしまう。

そしてそれに合わせるようにグチャヌチャと水気を含んだ音が個室に響いた。

キースの指は愛液に濡れ、その粘液はアイシャ自身の陰毛に白く泡立って絡みつく。

「はうう!! はあわっ!!! おふ!」

やがてキースは指を軽く折り曲げ、引っ掻くように奥にある膣内急所を責め立てた。

「あああ! やあ!! やああ!!! それ! だめ! だめだ!! やめろ!!! やめろおお!!」

アイシヤは目の前がチカチカするような感覚に襲われた。そしてその感覚が身体全体に広がり、

「んひいひいひいひいっ!!!」

鼻から声を上げ盛大に果てた。その時アイシヤの膣からはプシャアア!! と潮が噴いた。
「あひえ……あふあ……」

脱力して倒れそうになった身体をキースが支える。

「アイシヤ様、潮噴きましたね」

「あ……? しお……?」

「二回目なのに潮噴くなんて、やつぱりアイシヤ様はエロエリートですね」

キースが何を言っているのか理解出来ない。しかし自分が猥らな女だと証明されたと言われたみたいで、アイシヤは悔しさに涙を浮かべた。

自分の身体が言う事を聞いてくれない。

感じては駄目だ。気持ちよくなつてはいけない。そう言い聞かせるのにキースに触れると身体は女の反応を示してしまう。それが堪らなく悔しかった。

「なぜだ……」

「はい？」

アイシヤは腰に回った腕を振りほどくとキースを睨みつけた。

「何故こんな辱めを与える!! 私が憎いのか?! ならば……くっ……殺せばいいだろう!!!」

「憎いって……何でそうなるんですか？」

「私にこんな事をして何が楽しい！ 魔力供給だと言うならさっさと突っ込めばいい!!
そして最後は中なり腹の上なりに出して終わりにしてくれ！ これ以上の屈辱はもう」

アイシャの怒声にキースはポリポリと頭を掻いて、

「アイシャ様。俺のおちんぼはね、感情のない無反応な女性からは魔力を貰えないんですよ。そんなの全然満足出来ないんですよ」

俺自身がね——と心でつけ加える。

「感じまくって顔をぐしゃぐしゃにして獣みたいな声を上げるアイシャ様からじゃないといい魔力は貰えないんですよ」

「嘘をつくな！ 同じだ!! どうやったって!!」

「同じじゃないですって」

キースはアイシャの突った耳に口を近づけ、

「快楽に蕩けきったアイシャ様の綺麗な顔を一度でも見ておま〇こに挿入たら、あの刺激以外は欲しくありません」

そう言つて柔らかい耳を口で弄つた。

「なあ!? ひい!……」

鳥肌が立つ。耳を舐められているからか？ それともあんな姿の自分を綺麗と言われたからか？

こんな男に綺麗と言われて喜ぶはずがない。だからこれはきつと耳を弄られているせい

だ。そう決めてアイシャは固く目を瞑った。

「それじゃ、今度は俺がよくなる番ですね」

その声に目を開けると、ズボンを脱いでピンピンに勃ったおちんぼを晒したキースが立っていた。

「ひっ!!」

この前はキースのしている事を黙って受けていただけだったのでまともに見なかつたおちんぼ。それをこの狭い空間内で見せつけられ、グロテスクさに呆然となる。

子供の頃、父のを見た時と形状が違いすぎる。いや、あれが臨戦状態なのは分かるがそれにしてもグロい。

赤黒く淫水焼けした包皮は完全にずり下がり、丸く太い先端部を露出させている。それに蚯蚓みみずのような太い血管が這い回ってビクビクと動いているのだ。しかも先っぽから何かの液体が垂れている。

まさに魔道具である。股間に魔道具という話はあながち嘘じゃなかったのではと思える形状であった。

そんなあわあわしているアイシャに「場所交代です」と声をかけてキースは彼女を便座から降ろした。

脚がふらつくのを耐えてアイシャが床に立つと、代わりにキースが便座に正しい形で腰かけた。座っているのにおちんぼだけが上を向いて勃っている。

キースは腰を少しずらして浅く座ると、

「さ、乗って下さい」

何を求めているか分かったアイシヤは、スカートを脱いで扉のフックに引っかけるとガーターベルトも脱ごうとしたが、

「それは！ そのままで……」

こだわりのある男キースである。

アイシヤは言われた通りガーターはそのままにキースの脚を跨いで前に進むが、立ち止まってしまった。

「どうしました？」

「や……やり方が……わからん」

顔を逸らしてそう言うアイシヤにキースはやり方を指示した。

「俺の肩に手を置いて」

キースは自分のおちんぼを指で摘まんで固定する。

「そのまま下に腰を下ろして……穴に位置をあわせて……そうです」

おちんぼの先端が膣口に触れたのが分かった。そのまま座るとヌプヌプとアイシヤの中におちんぼが埋まってゆく。

「んっ……おお、相変わらず柔トロ……しかもメチャあつたかい……」

「んふっ！ んはあっ!! ……ああ、はいっ……たあ！」

対面座位の形で二人は繋がった。嬉しそうに笑っているキースの顔を見て、
「早く終わらせろ！」

膺から上がってくる快樂情報に必死に耐えてアイシヤは強気に言う。

「いや、アイシヤ様が動いてくれなきゃ」

「わ、私が!？」

「これはそういう形ですし」

本当なら下からでもユサユサと出来るがそれは言わない。戸惑うアイシヤに、

「早くしないと任務のお時間が始まっちゃいますよ？」

「つく……つくそ!!」

キースの言葉にアイシヤは動こうとするがうまくいかない。

これじゃ自分も気持ちよくない——そう思ってしまった、違う、私は気持ちよくならなくていいんだ! と慌ててその考えを打ち消した。

「俺の首に手を廻して、しがみつくようにすればいいですよ？」

「くび? ……抱きつけと言う事か!? ふ、ふざけ」

「時間がないですよ〜〜」

アイシヤはキースの首に腕を回し、抱くようにしがみつく。キースの匂いがした。

「くふうっ!!」

何故かは分からないが膺が震えた気がした。

「それで、腰をゆさゆさと……」

言葉に従って腰を動かすと甘い感覚が膺に溢れた。

「ふわあっ!!」



この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行

株式会社キルタイムコミュニケーション

〒104-0041 東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル

TEL03-3555-3431 (販売) / FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改ざん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。

©KILL TIME COMMUNICATION Printed in Japan

<http://ktcom.jp/>

二次元ドリームノベルズ

魔界転生
ジェノバ

戦うヒロインを屈辱させちゃう
かなり過激な
陵辱系ライトノベル!

フリーダム120%!?
ジャンルとかわれない
ドキドキクラブ!

呪詛嬢の師

あとみっく文庫

キルタイムコミュニケーション小説シリーズ



女刑事美優
美優は自らの身体から

日常に密着したエロス、
リアルな舞台設定で送る
官能小説シリーズ!

リアルドリーム文庫



あなたはどのタイプ?

二次元ぷち文庫



あの人気作品の
外伝作品もあっ!!
電子書籍しか読めないチチノベル

姫騎士 クラスメイト!
ビギニングノベルズ



小説家になろうの男性向けサイト
から書籍化!
アクターズノベルズ



異世界で
手に入る
宝物

ドキドキクラブな
ハーレム系
ライトノベル!

二次元ドリーム文庫